

第4章 モンゴル人が描いた東アジア共同体

リ・ナランゴア（野村 悠訳）

汎アジア主義という構想は、アジア諸民族に共通の起源と文化、そしてこの共通の文化を西洋の侵害から守るという共通の目的を主眼としていた。この構想に共感し触発されたアジアの民族は多い。しかしモンゴル人の態度はあいまいであった。モンゴル人が最も頻繁に接していたのは、潜在的脅威でもあるが、中国人の相手ともなり得るロシアであった。モンゴル人の見地からすると、最大の脅威は中国による植民地化であり、したがってモンゴル人は中国人からの独立を勝ち取ることができればなら西洋も含めて誰とであれ協力する心構えであった。そのため、汎アジア主義が近代化の破壊力からモンゴル文化の価値観を守るものである限り、モンゴル人の関心を引いた。しかし汎アジア主義が味方となり得る外部勢力からモンゴル人を遠ざける、あるいはアジア社会間の文化の違いを否定するものであれば、ほとんど魅力がなかった。モンゴル人の態度にいくらか変化が表れるのは一九三〇年代以降である。それでもモンゴル人は汎アジア主義あるいはアジア主義という言葉は決して使わず、代わりに「東亜の平和」「東亜の協和」「興亜」「東亜秩序」「東亜共栄圏」といった種々の間接的表現を用いて、広域的な国際共同体に対する興味を示していた。本章ではモンゴル人、特に一九三〇年代において日本の勢力下にあった人々が、東アジア共同体をどのように理解し想像したかを検討する。

1 汎アジア主義と汎モンゴル主義

今日のモンゴルは、独立した国家であるモンゴル国と、一九四九年から中華人民共和国の自治区である内モンゴルとに分断されている。両地域とも一七世紀から二十世紀初頭にかけてのほぼ三〇〇年間、満州人の統治下にあった。満州宮廷はモンゴル人と漢人の隔離政策を採っていたが、その統治の終期にはすでに多くの漢人移民がモンゴルの地に定住し、モンゴルの牧地を広域に渡って開拓していた。土地や税を巡って両民族間の争いが増え、こうした対立が暴力事件や虐殺にまで発展することもしばしばであった。王朝末期に南方で漢人が革命に奔走している時、北方のモンゴル人はいつでも独立を宣言できる体勢にあった。モンゴル人は満州皇帝に忠実であったが、王朝がその地盤を固めた後、特に王朝末期の数十年にかけて、もはやモンゴル人の権利を擁護しなかったことに失望していた。モンゴル人の目に満州王朝はすでに慈悲深い君主とは映らなかったのである。とは言え、モンゴル人にとって、満州王朝の正統な後継者を自任する中華民国に従わねばならない理由もなかった。モンゴルの土地に対する支配の正統性を巡ってモンゴル人と中国人が対立し、その闘争は約半世紀に及んだ。一九二〇年代にモンゴル人民共和国が成立し、ゴビ砂漠以北のモンゴル地域はソビエト連邦の支援を受けて事実上の独立を果たしたが、ゴビ砂漠より南の内モンゴルでは苦闘が続いた。内モンゴルはまず中華民国内での自治獲得を目指したが、成功は叶わなかった。そこで一九三〇年代になると、国民党政府下に残ったオールドスとトゥメトを除き、ジリム、ジョソト、ジョーオダ、シリングル、ウランチャブ各盟からなる内モンゴルが、日本の支援を受けて独立達成を試みた¹⁾。

日本や中国の知識人はその発言や著作において汎アジア主義を語る際に西洋を敵と見なしたが、こうした状況にあったモンゴル人の主要な敵は西洋ではなく漢人による植民地化であった。モンゴル人は汎アジアよりも汎モンゴルという考えに引かれていたのである²⁾。

モンゴル人がアジア主義にやや冷淡であった別の理由は、汎アジア主義によりアジア内の大国が得をするよう感じ

られたことである。汎アジア主義は満州人による帝国の旧国境線を承認しがちであった。モンゴル人から見ると、汎アジア主義はチベット、ウイグル、モンゴル各領土の保全を図る中国の主張を認めており、したがってモンゴル独立国家建設と矛盾した。換言すれば、モンゴル人は独立した政治体として東アジア共同体に貢献することを期待されていなかった。

一九三〇年代初期、三つの理由からモンゴル人の態度が変わった。第一に、モンゴル人が日本人と直接接するようになったことである。これによりモンゴル人は、日本の言うアジア主義がモンゴル人の民族自決を促進するかもしれないことに気付いた。日本によるアジア主義の主張に一貫していたのは、それがアジアの各民族国家による集合体であるという点であった。この集合体が日本の指導下にあるとしても、中華民国が漢人以外の民族に対して企図していたような同化は意味しなかった。三〇年代に日本による満州の占領と新国家樹立を計画するにあたって、モンゴル人は日本人と一体となって戦っただけでなく、建国とともに議論することさえあった。モンゴル人は日本人に鼓舞され、栄えある東アジアの建設に貢献しようとして、中華民国からの独立と民族アイデンティティの形成を目指した。モンゴル人は、モンゴル人知識人デグレイがオーストリア＝ハンガリー二重帝国をモデルに提案した「満州＝モンゴル二重国家」(徳古来 1933) 建設という目標を達成できなかったことに落胆していた。しかし一九三二年になると内モンゴル東部のモンゴル人は新国家が真の自治を認めると理解して、と言うよりそう思い込んで、満州国に加入した。満州国に不参加の内モンゴルを中心としたモンゴル独立国の建設さえ、日本人によって提案されていたのであった(松室 1933)。

第二に、日本を独立達成に利用できる可能性にモンゴル人が気付いたことである。そこでモンゴル人は、モンゴル問題を完全に国内問題と考える中華民国内での自治を期待するより日本人との提携に望みを託し始めた。実際この時期はモンゴル人が中華民国に対してかなり失望していた時期であった。しかも日本は近代的で、国際的な評価もあり、またアジア広域の繁栄を強く支持していたため、協力者としてより魅力があった(リ 2006: 299)。

第三に、以上のような外部要因に加え、大モンゴル帝国というモンゴル人自身の歴史が、モンゴル人にモンゴル再興の夢と自信をもたらした。一九世紀後半から二〇世紀前半にかけてモンゴル人知識人層は自民族が歴史に残した偉業を再評価すべく、モンゴル帝国やチンギス・ハンに関する歴史書を数多く書き著した。特に三〇年代に入ってからモンゴル語による雑誌や新聞はモンゴルの歴史物語をいろいろな形で取り入れた。またチンギス・ハンを祭った成吉思汗廟も建設された(田中 2009)。モンゴル人は自らの歴史を積極的に評価することによってモンゴル民族のアイデンティティを強化するとともに、アジアという政治的枠組み内における自民族の再興を目指したと言つてよい。

このようにモンゴル人の東アジア共同体に対する理解と想像には、現状における自民族の衰微に対する危機感と歴史上の偉業に対する自信という二つの矛盾する心理要素が働いていた。モンゴル人は近代国際社会において政治・経済的に遅れている事実と直面して、その復興のため外來の勢力である日本に頼むという、消極的ではあるが非常に現実的な行動をとった。同時に、歴史に偉業を残したがゆえに、モンゴル民族の再興ばかりでなく、アジアないし世界平和に対しモンゴル帝国が行ったように貢献することも可能であると確信していた。この複雑な心情を以って追及したのは興亜ではなく、あくまでモンゴルの復興を成し遂げることであった。したがって当時のモンゴル人が想像した東アジア共同体は、日本の政治標語を自己の目的に都合よく解釈した独自のものであった。

2 チンギス・ハンと東アジア協和

二〇世紀前半にモンゴル人が東アジア共同体を理解した際、その特徴の一つは、東アジアを常にチンギス・ハンの偉業と結びつけて考えたことであった。ユーラシアを跨ぐ壮大なモンゴル帝国を創った歴史は、モンゴル人に自信を与えたばかりでなく、東アジアという政治空間とその人々との関係を独自に理解し想像することを可能にした。モンゴル人は、モンゴル帝国がアジアに残した遺産は多大であると考えていた。モンゴル人指導者の多くにとって、東アジアの協和という構想、あるいは世界の親和という発想さえ、新奇なものではなかった。彼らは、多民族の平等と平和な共存という考えがチンギス・ハンから生じたと思っていた。アジアからヨーロッパにまで及ぶモンゴル帝国にお

いてチンギス・ハンは施した平等政策と多文化振興という政策に、モンゴル人は繰り返し言及した。諸宗教を平等に扱うという彼の施策は、全人類の平等にまで拡大して解釈された。チンギス・ハンの施策に触れることによって、モンゴル人指導者層は、モンゴル人が日本の勢力と圧力に屈してその政治的標語を受容しているのではなく、モンゴル人の失われた栄光を回復するという祖先の志を継いでいることをほめかしたのである。これはまた、日本人の高唱するアジアの協和社会がモンゴル人の歴史に由来することも意味した。たとえば、二〇世紀初頭の最も著名なモンゴル人詩人、ナ・サインチョグトは当時のアジア政治を、

兄弟の如く助け合え

アジア大陸の諸民族よ

正義を求め

立ち上がるのだ すべてのチンギス・ハンの子孫たちよ

とうたい、チンギス・ハンを称揚しながら、モンゴル人に限らずアジアの全民族をチンギス・ハンの精神的な後継者とした(Saichungga 1942: 36)。モンゴル人は中華民国政府に対し、チンギス・ハンの施策にない各民族を平等に扱い、彼らへ自治権を付与するよう注意を促した。一九三三年にモンゴル人が中国政府へ送った自治宣言にはこう書かれている。

我々の太祖チンギス・ハンはヨーロッパとアジアをと共に征服し宇内を平定した。中国内地に正義と平和が、各民族に調和が訪れた。中国の版図は空前の規模に拡大し、東アジアの全民族がその栄光に浴した。これはあまねく世界が知るところである。後継を名乗る者はその教えを遵奉して天下を公と為し、一視同仁を以って彼我を分けず、よろしく四海を一家とすべし。(Jagchid 1999: 72)

重要な政府関係の原則や公約のほとんどがチンギス・ハンあるいはモンゴル人の輝かしい歴史について触れ、東アジアの平和ないし協和に関し過去においてモンゴル人が行った貢献とともに、将来においてモンゴル人が行うであろう貢献についても述べている。一九三七年の第二次蒙古大会は次のように宣言した。

太祖チンギスカンの保持せる諸民族抱擁一致合作の大精神に則り、即日蒙古聯盟自治政府を建設、蒙古固有の疆土を以て領域となす。(中略) 互惠互助、共存共栄の精神により友邦との敦睦を計り、その堅持する東洋平和確立の大理想顕現に協力すべし。(中略) 凡そ我全体館員および将士は挙りて一致擁護すべく、願わくは我民族に理解哀情を有する国家民族の補助支持により、相俱に人類平和に貢献するを得ば、ただに蒙古の栄幸たるに留まらず、以て全世界の光輝たるべし。(ドムチョクドンロブ 1994: 194)

この宣言は明らかにモンゴル人の役割を、東アジアという大きな枠組みだけでなく、世界平和という文脈にも即して述べている。政治的指導者ばかりでなくモンゴル人知識人もまた、多文化平等というチンギス・ハンの政策にしばしば言及し、モンゴル人の役目と志を明らかにした。前述のナ・サインチョグトは次のようにうたう。

我らの祖父 チンギス・ハン

我らの聖なる英雄 チンギス・ハン

我らのすぐれた賢人 チンギス・ハン

我らは望む

世界を震撼した その偉大な霊氣を得んことを

不朽の覇氣と理想をもって
同志たる諸民族のため力を尽くせるよう

(中略)

我らは望む

その三大陸を制覇した深謀と思考を

偉大な歴史とその記録から学び

同胞たる諸民族のため力を尽くせるよう

(中略)

我らは望む

人種や貴賤の隔てなく 広く等しく愛したその情けを

この胸に刻まんと

連帯する人々のため力を尽くせるよう (Saichungga 1942: 38-39)

この詩は当時のモンゴル人知識人の描く未来像を反映し、チンギス・ハンの遺業を引きながら当時の政治的標語である東アジア共同体について述べている。また、東アジア共同体における人と人との間の緊密な関係を描き、モンゴル人はチンギス・ハンの精神を受け継ぎ、その友なる諸民族のために力を尽くすとしている。

3 東亜新秩序

日本は東アジアの諸問題について地域総体としての展望を唱えたが、その謳い文句に対するモンゴル人の理解におけるもう一つの特徴は、こうした文句を文字通り受け取り、自らの政治的な状況を以って理解あるいは想像したことである。こうした表現の背後にあった本来の政治的目的を無視し、あまりに絶望的に思えたモンゴル人の状況に一筋の希望の光を当てようとして、独自の方法で解釈したのである。

一九三七年に日中戦争が勃発してから、モンゴルのメディアでは「東亜の協和」や「東亜の平和」といった表現に代わり「東亜新秩序」が使われた。この表現の変化は外交上の言葉の遊びに過ぎないと見ることもできるが、それ以上のものであった。「東亜新秩序」は一九三八年末に近衛文麿により宣言されたもので、日本、満州国、中国からなる連合体の構築により対中戦争の泥沼からの脱出を意図し、三国間の経済協力と外部勢力の排除を目標としていた。中国国民党党首であった蒋介石は日本によるこの提案に懐疑的で、中国全土の占領という野心を隠す口先だけの宣伝文句でしかないと感じていたため、あくまで対日戦争を続ける決意であった。そこで日本人は蔣との交渉を止め、同じ国民党で蔣の政敵であった汪精衛を擁立して、蒋介石率いる国民党政府とは異なる政権を立てた。新秩序により日中満連合体が設立され、中国が東アジアにおいて日本と並ぶ重要な位置にあることも再確認された。日本人は蔣政権に相対する政権の樹立に参加した中国人指導者に報いるため、満州国を除く中国領土の保全に、少なくとも外交上は同意した。この成行がモンゴル人に意味したのは、日本が中国からの内モンゴル独立を正式に認めることはないということであった。しかし皮肉にもモンゴル人にとって、新秩序は旧秩序との決別と変革、新たな可能性を意味し、それゆえモンゴル人指導者や知識人たちもその発言や著作において東亜新秩序を取り上げていった。

こうしたモンゴル人独自の解釈を理解するには、当時モンゴル人が置かれていた政治状況を考えなければならぬ。当時はモンゴル人が、ゴビ砂漠の南方で陥っていた政治情勢の膠着に対処するため、斬新な発想を必要としていた時

期であった。内モンゴル東部は一九三二年から三三年にかけて満州国に併合されたが、数年間の蜜月が終わると、確保されたはずの自治権あるいは特権は縮小された。一九三六年、満州国で最も尊敬され活躍していた指導者の一人であった凌陞（リン・シェン）が、ソ連のスパイとされ処刑された。モンゴル人の行政機関である蒙政部は縮小され、土地改革によってモンゴル人はその土地の大半を失った。内モンゴルの西部では、モンゴル独立を約束していた日本軍部が「時期尚早」を理由にモンゴル独立について一切口にしなくなったことで、徳王指揮下のモンゴル独立運動も行き詰まっていた。蒙古連盟自治政府は一九三九年、日本軍の援助で創られた察南・晋北という二つの中国自治政府と合併して蒙古聯合自治政府になり、モンゴル人による自治政府の性質が薄れていた。モンゴル人は後に、東亜新秩序構想が必ずしも中国からの独立モンゴル国建設につながらないと悟るが、それまでの間この構想はモンゴル人の議論に新風を呼び込んだ。モンゴル人は旧秩序を打破することでモンゴル人に対する中国の主張も覆され、したがってモンゴル人の新国家建設も自然な成行きであると思っていた。そうであれば日本も、中国支配からのモンゴル人解放を助けていると公表しなくてすむ。これはまた、モンゴル人独立の可否について日本が口出しすべき立場になかったことを意味する。しかし現実には、モンゴル人は独立国家の設立と安定に日本の支援を必要としており、さらに現地における日本軍の脅威を除去できるような一段高次の秩序も必要としていた。徳王はそのため、一九三八年から四〇年にかけて二度に亘り日本を訪問し、モンゴル独立国家についての話し合いに臨んだ（ドムチョクドロンロブ 1994）。

4 満州国とモンゴル再興

内モンゴル中部の徳王率いる蒙古連盟自治政府（後の蒙古聯合自治政府）支配下のモンゴル人だけでなく満州国内のモンゴル人もまた、東アジア共同体の共栄よりもモンゴル人国家の再建を重視した。新生満州国は、満州、モンゴル、漢、日本、ロシア（朝鮮が入ることもある）各民族間における「民族協和」の方針に基づいていたため、東アジア共栄像の原型と見なされていた。モンゴル人はこの「民族協和」と「東亜建設」という新たな政治的標語を取り入れたが、

真のモンゴル人自治を達成するという目標に変わりはなかった。

建国の討議中、フルンボイル地域のモンゴル人指導者として尊敬されていた凌陞は、「モンゴル人の究極の目標は内モンゴルと外モンゴル、フルンボイルを統一したモンゴル国家の樹立であるが、現状においては日本に頼るしかない」と述べている（外務省1995: 980-81）。彼は、独立国家を設立して初めて、東アジア共同体に対するモンゴル人の貢献も可能になるという信念を持ち続けた。そのため一九三六年、満州国の土地改革に反対して、「最も重要な事項は、国家によってモンゴル人の土地が保護されることである。次に東アジアの人々の調和がはかれることである」と述べた。満州国における別のモンゴル人指導者、ブヤンマンダフも同様に、「満州国へのモンゴルの加入は、土地の権利が保護されるか否かにかかっている。しかし、我々の権利が奪われるなら、満州国に加入する意味はない」と発言した（蒙政部総務司 1936: 202）。凌陞もブヤンマンダフも、モンゴル人が満州国内で自らの土地とアイデンティティを守り抜くこと、またもし国がこのモンゴル人の希望を尊重しないのであればモンゴル人は建国に参加しなかったであろうし、したがって満州国の五族協和にも東アジアの協和にも関心を失うであろうことを示唆した。

日本人による統制が比較的厳しい満州国において、政治的な意見は日本寄りなはずであったが、新聞紙以外の定期刊行物に関しては一九四一年までそうした傾向はめったに見られなかった。なかでも『丙寅（Ughun Bars）』誌はほとんど日本寄りの見解を取り上げていない。代わりに同誌の記事や論文はすべて、モンゴル人が輝かしい過去をしのび、現在の政治経済状況に向き合い、さらにモンゴル文化を復興するにはどうすべきかについて述べたものであった。「未来に続く我々の道（Biden-nu emne-yin jam）」という歌は、「全世界に知れ渡る、モンゴル人の過去の名声、地に落ちたその名、今こそ回復の時」と歌詞にうたっている（Ughun Bars 1938 [12]: 42）。太平洋戦争中、日本の戦争勝利情報と日本軍人の勇敢さを比較的頻繁に報道した『大青旗（Yeke Köke Tug）』誌ですらモンゴル復興を主張した。当該誌に投稿したチラゴン（Chiragun）という青年はモンゴル人の「自治が意味するのは中国からの分離にとどまらない。それはモンゴルを再興することである」とまで言い切っている（Yeke Köke Tug 1943 [4]: 131）。満州国内および内モンゴル中部のモンゴル人による雑誌は互いに意見を交換し合い、また双方に寄稿する著者もいた。

こうした事情から、満州国内外のモンゴル人の間で、モンゴル人の将来および広域アジアに対して一定の合意ができた。それは「(東アジア) 共存共栄に貢献できる民族として実力を確保するには、団結して自立のための資本を獲得せねばならない」というものであった (Yekhe Köke Tug 1943 [3] : 1)。一九三八年には満州国内外のモンゴル青年によって「モンゴル復興」と「大モンゴル国建設」を目的にした蒙古青年結盟党が結成された。彼らは徳王と同じく、蒙古聯合自治政府を「蒙古人ノ独立国家に非ズ」と見ていた。蒙古青年結盟党はモンゴル民族復興を実現するため、「全蒙地域ノ同士ヲ糾合シ大蒙古国家建設ヲ意図シ」、「日本官憲ノ彈圧ヲ巧ミニ欺キ合法的裏面工作ニ依リ蒙古人各層ニ対シ独立ヲ開始セントス」と綱領に書いている (外務省史料 A.6.1.2.1-14)。蒙古青年結盟党は日本軍の圧力によって一九四一年に解散せざるを得なくなったが、この綱領は、当時の満州国内外における全モンゴル人が団結してモンゴルを復興し、独立した国を建設するという意図をよく表している⁽⁴⁾。

満州国内のモンゴル人にとって内モンゴル独立運動を率いる徳王は、モンゴルの伝統と文化、そしてモンゴル民族主義の象徴であった。満州国で出版された『大青旗』誌第三号(一九四三年)はその前書きに「モンゴル人よ、徳王の辮髪をご覧」という見出しをつけ、モンゴルの伝統に誇りを持ってモンゴル独立に向け努力している徳王の姿を見習うよう呼びかけ、以下のように述べた。

ドムチョクドロブ王(徳王)の胸は勇敢で誇り高い(モンゴル)民族の独立に向けた意志で溢れていることであろう。彼の強い意志がその辮髪に現れているのではなからうか。モンゴル人にはモンゴル人という名にふさわしい再興に向かう誇りと力がある。その誇りと力とは何であろうか。どこにあるのか。徳王の辮髪をご覧。(Yekhe Köke Tug 1943 [3] : 1-2)

満州国支配下であれ、中国国民政府下であれ、モンゴル人の最終的な目標は「遅れた (gochuragsan) 文化や教育、経済、政治的地位を自強し、モンゴルを再興する (Monghol-yien mandughuqu) ことであった (Ulaghan Bars 1939 [5]

10 : 15-25 ; Monghol Sedkul 1935 [2] : 25-28 ; Yekhe Köke Tug, 1943 [1] : 6 : 130-137)。

5 大東亜共栄圏

「大東亜共栄圏」という構想はモンゴル人にとってさらに魅力的であった。そこで提示された政治体制が、全参加民族に自らのアイデンティティと自治を保障するように見えたからである。モンゴル人は、この構想により、大東亜の主権国家である中国に領土保全が保障されるとしても、イギリス連邦制に似た制度も創設されるかもしれないと考え、そうであればモンゴル人活躍の余地もできるであろうと期待したのである。モンゴル人は西洋からの脅威を直接には全く受けていなかったが、対西洋列強を掲げる太平洋戦争へのアジア人民動員を目的としたこの大東亜共栄圏構想はモンゴルの新聞報道や文学作品において普及していた。(Songinwangchug 1941 : 23 ; Gombojab 1941 : 38 ; Yekhe Köke Tug 1943 [1] : 2 : 1)。「東亜共栄圏」はモンゴル語で Jekün Ajia-yin neiteber badaragu küriyeleng または Jekün Ajia-yin gamtu-bar gereluku küriyeleng と訳された。前者は「共に興る」という意味であるのに対し、後者は「共に光る」という意味である。

太平洋戦争は一般に、東洋対西洋の戦争であると理解されていた。アジア人民を西洋から解放するという発想は主に東南アジアに向けられていたが、この考え自体は大東亜共栄圏の一員であるモンゴル人にも関係深いとして、モンゴル語のメディアに広く受け入れられた。「全モンゴル青年の歌」(Monghol jalaghus-un gamdaraltu daguu) と題された詩は東アジアの平和のために西洋と戦うことをモンゴル人の若者に呼びかけた (Erdembülag 1941 : 88)。

全モンゴル青年よ

私心無く前進し 宿敵の蔣を撃て

漢滿蒙日全民族は団結する

英米と共産主義を滅ぼして 黄金の世界への入り口に立ち
白人から我々の国を守るために

モンゴル人は太平洋戦争において日本人の側に立った。モンゴル人は一方で日本の軍事的影響力を不快に思っていたが、他方で日本が敗戦した場合モンゴルに何が起きるか予測できなかった。そこで日本の味方をし、「日本が負ければ我々も負ける」(Songinwangchug 1941: 20, 37)という表現をたびたび用いた。興蒙会会長ソジンヴァンチュク王は太平洋戦争勃発に際し、「日米開戦にあたって我々モンゴル人は何をすべきか」と題した論文を発表した。彼はアジアを西洋に抑圧された地域と見なし、それを理由にモンゴル人は日本人の味方となるべきことを説いた。もう一つの理由は、一九三三年にモンゴル人が自治を要求した時、中国国民党政府が適切な支援を行わなかったのに対し、日本人はモンゴルの自治を支持したことである。そこで彼はモンゴル人がその中国政府に肩入れしているアメリカ人を敵とし、日本人に味方すべきことを説いた。すなわち、

アジア諸民族は百年以上に渡り西洋に抑圧されてきた。アジアの黄色人種が世界に対してどのように貢献したかを考えると、無念でならない。我々モンゴル人が輝かしい歴史を持ちながら今日の苦境にあることは殊に耐え難く、我々の祖先の名声を回復したい思いに駆られるのである。(中略)日本の友は我々の友であり、日本の敵は我々の敵である。東亜新秩序は英米のような西洋列強をアジアから駆逐してアジア諸民族の共栄をはかるものである。(中略)「東亜永遠の平和」は日本の戦勝によってのみ保障され得る。

彼は「我が民族のため、友邦日本のため、そして日本の援助に報い東亜共栄を実現するために、我々モンゴル人は一致団結してこの大戦に貢献する」と結んだ(Songinwangchug 1941: 19-22)。

モンゴル人はなおも日本との同盟が妥当な選択であると信じていた。その思いは、開戦当初の日本が勝ち続けた時期に著しかった。東南アジアにおける日本の戦勝についてモンゴルの新聞紙や雑誌は、「迅速かつ順調な勝利が打ち続き」、「まるで我々の大東亜戦争が神仏の御加護を得たかのよう」で、「アジアの諸民族が待ち望む平和は今や目前にある」と報道した(Dekin Mending Mongol-un Chinige 1941: Monghol Setkil: Yake Koke Tug 1943)。

モンゴル人には大東亜共栄圏構想の実現がかつてないほど近くに感じられた。第一に、太平洋戦争開戦のわずか二、三カ月前である一九四一年、徳王が率いる蒙古聯合自治政府は蒙古自治邦(Monghol-un öbedegen jasqu Uls)の名称を使うことを許された。日本語と中国語の呼称では独立した「国家」という概念を避けて「自治邦」という表現が使われたが、モンゴル語の名称にあるオルス(Uls)とは国のことである。したがって少なくともモンゴル語ではモンゴル人は「国」を作ったことになる。これはモンゴル人が望んだ形の独立ではなかったが、それでもモンゴル人はこれを最終段階である独立国家建設への踏台と考え、モンゴル人指導者層は希望を新たにした(Jagchid 1999: 263)。第二に、太平洋戦争により日本軍は主力を満州とモンゴルの戦場から東南アジアへと移動することを強いられた。この移動でモンゴル政府に対するモンゴル人の権限が拡大し、モンゴル人国家の設立と、その国家による多大な貢献を通じた東アジア共栄圏建設も可能になったように思えたのである。モンゴル人の目には大東亜共栄圏がモンゴル帝国に重なって見えたかもしれない。モンゴル帝国は四つのオルスの連合から成り、各オルスは後に完全に独立していたのである。

一九四二年初頭、モンゴル政府の主席であった徳王は太平洋戦争を支持する旨の声明を出し、モンゴル政府の使命は東アジア北部国境付近における特別防共地帯の防衛を強化することであると主張した。彼はその声明文中において、一方で過去におけるチンギス・ハンの大業を喚起し、モンゴル人に自らの将来に目を向けるよう促した。他方で日本の発展がモンゴルの発展を助け、またモンゴルの発展が日本の戦勝に寄与したことも力説した。ジャグチド・セチンが指摘した通り、「こうした発言は日本に対する外交辞令のように見えるが、当時の徳王の本心を表していた」(Jagchid 1999: 266)。徳王の樂觀的な心情は、彼が興蒙学院の開校の際、「もし我々モンゴル人が友邦日本と協同連携してアジア新秩序の一翼を担い、東アジア諸民族との共存共栄を実現すれば、我々モンゴル人がその政治的大業を成

す日も迫るであろう」と語ったことから伺える。(De tenkūn noyan tan sorgaltu jarig 1941: 10-11) 彼の講演はアジア共同体に対する期待とモンゴルの将来に対する希望に満ちている。

徳王のモンゴル政府が満州国に設置した外交連絡部は一九四三年、満州国内のモンゴル関係各部署に新年の祝辞を送り、モンゴル人関係者に対して「モンゴル人永遠の繁栄に向け、大東亜戦争に勝利しよう」(Koke Tug 1943 (4): 121)と熱く説いた。

ゴビ砂漠以南のモンゴル人の多くは、ちょうどロシア人が一九一一年に北部のモンゴル人を中国の支配から「救済した」ように、日本の干渉も内モンゴルにおける新国家樹立に繋がるのではないかと考えた。また、まさに民族同士の隔離という「慈悲深い」政策を採る欧米帝国主義下で起きたように、日本との提携がモンゴル社会を独立に向けて近代化し強化する動因となるようにも思えた。日本勢力下にあるモンゴル人の立場は複雑であったが、これは満州国の標榜する多文化社会を維持するために、日本が満州国にモンゴル人の存在を必要としたからである。にもかかわらず日本は一九三七年から、内モンゴル中部を領土の一部とする一連の自治政府を支持した。もし日本が満州国や東南アジアで用いた方針を適用していれば、こうした自治政府はただちに共榮圈内の正式な独立国家となったであろう。しかしモンゴル人に対する日本の方針は、より大きな政治的要請である対中国政策に制約された。中国において汪精衛を利用して親日政権樹立を始めた以上、モンゴル人独立はあり得なかった。モンゴル人はそれでも独立と自治の獲得に向けて奮闘したのである。

6 興亜と興蒙

モンゴル人は自民族の歴史に対して極めて肯定的であり、自らの現状に非常に批判的であった。このことがモンゴル人の民族主義を高揚させた。モンゴル人は、世界においてではなくとも、せめてアジアにおいて独立した政治的役割を果たすことを目標とした。さらに独立国家を確立しなければアジア広域の共同体に対して政治的に貢献できないとも信じていた。しかし同時に、独立という目標の達成には地域の安定が重要なことも分かっていた。それゆえに平和に繁栄する東アジアという構想を支持し、地域の平和に貢献することに関心を寄せたのであった。モンゴル人指導者の一人、メグデンボーはこうした思いを以下のように述べた。

現下の国際情勢は不安定である。モンゴル人は興亜の一翼を担い、重い役割を演じてきた。我々の責任は現時の国際情勢においてさらに重みを増しつつある。モンゴル国家の再興が今ほど大切な時はない。

汎アジア主義は、全アジア人民が全体の利益を求め協働するという理想に立脚していた。しかし実際には自己本位の展望であった。中国人は日本のアジア大陸侵略に対し警告するつもりで汎アジア主義を提唱し、日本人はアジアにおける日本の指導権に力点を置いて高唱した。モンゴル人やアジア大陸の他の諸民族は、一方で日本と中国の勢力拡大を阻止し、他方で自らの国家建設に対する日本の援助を取り付ける意図で合唱したのである(Naranga 2011: 248)。モンゴル人の理解した汎アジア主義あるいは東アジア広域における政治的展望とは、何よりもまずモンゴル人国家の復興であり、次に東アジア広域に対する貢献であった。

注

- (1) 本章は国民党の勢力下にあったモンゴル人の見解については考察しない。
- (2) 汎モンゴル研究に関しては Atwood (2002): 張 (2011): 二本 (1997) を参照。
- (3) サイチョンガーはその代表的な人物であった。彼はチャハル出身で、日本留学当時からたびたび詩や論文をモンゴル機関紙に寄稿していた。帰国後は徳王率いる蒙古連合自治政府によるモンゴル語の機関紙に啓蒙的な文章を定期的に送り、また満州国で出版されたモンゴル機関紙にも投稿している(『丙寅』第五卷九号、一九三九年九月)。
- (4) 蒙古青年結盟党に関して詳しくはエルデンバヤー (2008: 2009) を参照。

参考文献

- 額日登巴雅爾(エルドンバヤル)(2008)「日本支配期、内モンゴルにおける『蒙古青年結盟党』の設立と消滅(一九三八―一九四一年)」「内陸アジア史研究」二三、九五―一二三頁。
- 額日登巴雅爾(エルドンバヤル)(2009)「綱領の分析から見た蒙古青年結盟党」(一九三八―一九四一年)の設立目的及び性格——近代における内モンゴル知識人の民族主義思想の一例」「日本モンゴル学会紀要」三九、四九―六六。
- 外務省史料 A.6.1.2.1-1「滿蒙政況関係雑纂 内蒙古関係」第五卷(蒙古独立運動ヲ目的トスル『蒙古青年結盟党』ノ策動ニ関スル件)。
- 田中剛(2009)「成吉思汗廟の創建」森時彦編『二十世紀中国の社会システム』京都大学人文科学研究所、一二三―一四二頁。
- 張啓雄(2011)「汎モンゴル統一運動——別角度から見たハルハ独立」『人文學報』京都大学人文科学研究所八五、二七―六一頁。
- 外務省(1995)「モンゴル政庁および青年党などによるコロンバイル独立運動の状況について」『日本外交文書』昭和元年、一卷五号、外務省。
- 二本博史(1997)「大モンゴル国臨時政府の成立」『東京外国語大学論集』五四、三七―五八頁。
- 松室孝良(1933)「蒙古国建設に関する意見」『現代史資料』八・日中戦争一、みすず書房、一九六四年、四四九―四六三頁。
- 徳古来(1932)「意見書」『重要国策文書』四〇七、片倉資料六八、戦史資料室。
- 蒙政部総務司(1936)『第一回興安各省省長會議議事録』双発洋行印刷。
- リ・ナランゴア(2007)「内モンゴルにおける『蒙強』政権」——日本による『傀儡国家』の性質」『岩波講座アジア太平洋戦争第七巻 支配と暴力』岩波書店、二八五―三二二頁。
- ドムチョクドロフ(1994)『徳王自伝』森久男訳、岩波書店。
- Atwood, Christopher P. (2002) *Young Mongols and Vigilantes in Inner Mongolia's Interregnum Decades, 1911-1931*, Leiden : Boston : Brill.
- 'De terikün noyan tan sorgaltu jartig' (1941, *Dagin Manduqan Mongo-un Chingege* [復興するモンゴルの情報] Chinggis Khan 736 (9) 張家口 : 蒙強新聞社。
- Erdenibulag (1941) *Dakin Manduqan Monghol-un Chingege*, Chinggis Khan 736 (13).
- Gombojab (1941) *Dakin Manduqan Monghol-un Chingege*, Chinggis Khan 736 (13) : 37-40.
- Jachid Sechin (1999) *The Last Mongol Prince : The Life and Times of Demchugdongrob 1902-1966*, Bellingham : Western Washington University.
- Köke Tug [青旗] (1943) 四号。
- Li Narangoa, 'The Assembly of the Greater East Asiatic Nations, 1943', in Sven Saaler and Christopher W. A. Szpilman eds., *Pan-Asianism A Documentary History* vol. 2, Lanham, Boulder, New York : Roman & Littlefield, 2011 : 243-248.
- Monghol Sedkil* [蒙古報] (一九三五年一月) 第二卷一十二号、新京、蒙政部印刷。
- Saichungga (1942) *Sedkil-un qani* [心の友] Kaigan : 'Terigin noyan-u durnam-un ghajar'.
- Songinwangchug (1941) *Dakin Manduqan Monghol-un Chingege*, Chinggis Khan 736 [13] : 17-37.
- Ulgan Bars* [丙寅] (一九三九年一月) 第五卷一〇号、開魯、蒙文学会。
- Yöke Köke Tug* [大青旗] (1943) 第一卷二号(三月) : 第一卷三号(五月) : 第一卷六号(十一月) : 第一卷四号(七月) 新京、満州図書株式会社。

アジア主義は 何を語るのか

記憶・権力・価値

松浦正孝
[編著]



ミネルヴァ書房

序章 「アジア主義」の広域比較研究

- 1 広域研究プロジェクトの経緯と基本的立場……………松浦正孝 1
- 2 「アジア主義」を議論する際の方法論……………9
- 3 「西洋」とアジア、イスラーム……………13
- 4 アジア主義と中国……………22
- 5 日本帝国のアジア主義とアジア……………27
- 6 戦後のアジア主義とアジア地域主義……………37
- 7 本書の理論的含意……………46
- 8 アジア主義の行方……………67

第I部 アジア主義とは何か

77

第1章 アジア主義におけるネットワークと幻想

- 1 ネットワークとしてのアジア主義……………カロライン・S・ハウ／白石 隆（浜田樹子訳）78
- 2 リーサルスの「ヨーロッパ」、末広の「アジア」……………79
- 3 布引丸事件のネットワーク……………83

4 まとめ……………89

第2章 アジア主義と地域主義の交錯……………91

——「開かれた地域主義」におけるアジア主義の遺産——

- 1 「東アジア共同体」論をめぐるアジア主義と地域主義の交錯……………大賀 哲 98
- 2 「開かれた地域主義」の形成と展開……………98
- 3 「東アジア共同体」論の形成……………105
- 4 アジア主義の遺産としての地域主義論……………112

第3章 韓国のアジア主義における断絶と連続……………116

- 1 問題の所在……………姜 東局 124
- 2 近代韓国におけるアジア主義の展開……………124
- 3 アジア主義をめぐる相関関係からみた東アジア論……………126
- 4 東アジア論の展望……………132

第4章 モンゴル人が描いた東アジア共同体……………143

- 1 汎アジア主義と汎モンゴル主義……………リ・ナランゴア（野村 悠訳）146
- 2 チンギス・ハンと東アジア協和……………147
- 3 東亜新秩序……………149

4	満州国とモンゴル再興……………	154
5	大東亜共栄圏……………	157
6	興亜と興蒙……………	160

第Ⅱ部 西洋への対抗・競争としての「アジア」

165

第5章 ロシアにおけるアジア主義とユーラシア主義…………… 浜由樹子

1	二つの「アジア」……………	166
2	ロシアにおけるアジア主義……………	168
3	ロシアにおけるユーラシア主義……………	171
4	ロシアのユーラシア主義と日本のアジア主義の邂逅……………	174
5	「アジア」をめぐる思想と権力……………	182

第6章 ナショナル・アイデンティティ…………… ノエノエ・シルヴァ（松本佐保訳）

1	ナショナル・アイデンティティの発展……………	186
2	一九世紀中盤に強固となったハワイアンのナショナル・アイデンティティ……………	189

第7章 多様なアジアの想起…………… ブリジ・タンカ（水谷明子訳）

——インドのアジア観の探索——

3	カラカウア王の時代……………	190
4	カラカウアのモットー……………	191
5	カラカウア世界周遊……………	194
6	結論としての政治的皮膚……………	196

第8章 白人優位主義へのアジア主義の対応…………… 松本佐保

——アジア主義の人種的連帯の試みと失敗——

1	アジア主義における人種問題を論ずる意義……………	212
2	日清戦争と日露戦争から生まれた黄禍論と反黄禍論の言説……………	215
3	英語圏の知的ネットワークにおける白人優位主義の形成……………	216
4	排華移民法に見る白人優位主義ネットワーク……………	219

- 5 排日移民法と「白人優位主義環太平洋ネットワーク」……………222
- 6 対日移民法、対日外交と安全保障政策……………225
- 7 「白人優位主義ネットワーク」と大英帝国、アジア主義におけるインド要因……………228
- 8 大東亜戦争は人種戦争だったのか……………233

第9章 日本における汎アジア主義と英国……………

——一八九五—一九五六年——

アントニー・ベスト（松本佐保訳）……………240

- 1 英国の対アジア主義観研究の意義……………240
- 2 英国、日本、黄禍論……………241
- 3 第一次世界大戦、アジア主義と日英同盟の終焉……………243
- 4 戦間期のアジア主義……………247
- 5 戦時中と戦後のアジア主義……………249
- 6 英国によるアジア主義の評価……………250

第10章 グローバルなアジア主義における……………

「ムスリム世界」……………

ジェミル・アイドウン（浜由樹子訳）……………255

- 1 東アジアを越えるアジア主義……………255
- 2 ムスリム連帯のヴィジョンは、汎アジア主義版アジア……………256

- 3 日本帝国とムスリム汎アジア主義ネットワーク……………264

- 4 ムスリム汎アジア主義の遺産……………270

第11章 汎イスラーム主義と汎アラブ主義の新段階……………

——一九三一年エルサレム・汎イスラーム会議からの考察——

白杵 陽……………274

- 1 汎アジア主義と汎イスラーム主義——中谷武世による同時代のイスラームの認識……………274
- 2 嘆きの壁事件と汎イスラーム会議におけるエルサレムのムフタイーの役割……………280
- 3 汎イスラーム会議の開催とその後……………287

第Ⅲ部 中国をめぐる「アジア」観……………

293

第12章 近代中国におけるアジア主義の諸相……………

吉澤誠一郎……………294

- 1 近代中国にアジア主義はあったか……………294

- 2 日本のアジア主義への対応……………296

- 3 中国におけるアジア主義的思潮の展開……………303

第13章 東アジア視角の認識論的意義……………

孫 歌（関 智英訳）……………315

- 1 中国社会的既定の東アジアという観点とその問題性……………315

- 2 現代の歴史過程における東アジア内部の不均衡な状態……………
- 3 冷戦の歴史と東アジアの関係……………
- 4 ポスト冷戦時代の歴史視野と東アジア叙述の思想の性質……………

第14章

近代中国の南洋観と越境するアジア像……………

——『南洋群島商業研究会雑誌』からの分析—— 劉 宏・曹 善玉（河野 正訳）……………

1

南洋に対する思考……………

336

2

李文権と南洋群島商業研究会……………

336

3

『南洋群島商業研究会雑誌』のアジア想像……………

340

4

近代中国における新南洋観と越境するアジア観のひな型……………

348

第15章

中国とアジアの地域化……………

1

地域としてのアジア……………

プラセンジット・ドアラ（浜由樹子訳）……………

354

2

帝国主義以前、そして帝国主義の地域主義……………

361

3

アジアにおける反帝国主義的地域化プロジェクト……………

363

4

中華民国における中国とアジア地域主義……………

368

5

中国、ASEAN、そしてアジアの地域主義……………

370

375

第IV部 日本帝国とアジア主義

383

第16章

「アジア主義」とインド……………

——ガーンデイーは日本をどう見たか——……………

長崎暢子……………

384

1

インドにおける「アジア主義」……………

2

近代インドにおける民族独立運動の方法とその変化……………

384

3

ガーンデイーの思想形成と「アジア人」体験……………

386

4

日露戦争前後のインドと日本……………

389

5

ガーンデイーにおける日本観とその変化……………

394

6

インドにおける「アジアの中の日本」……………

397

第17章

明治期クリスチャンと朝鮮開化派……………

——「キリスト教」と「アジア主義」の交錯——……………

松谷基和……………

409

1

「キリスト教」と「アジア主義」……………

409

2

明治期キリスト教と朝鮮の接点……………

409

3

明治期クリスチャンと朝鮮開化派……………

415

4	大日本海外教育会と「キリスト教アジア主義」の行方	420
---	--------------------------	-----

第18章	汪精衛政権の「大亞州主義」とその実現構想	土屋光芳	424
------	----------------------	------	-----

——周化人の「亜細亜連盟（汎亜連合）」——

1	孫文の「大亜細亜主義」	425
2	汪精衛の「大亞州主義」	427
3	周化人の「大亜細亜主義」と「亜細亜連盟（汎亜連合）」	430

第19章	大亜細亜協会の活動と植民地知識人の対応	何 義麟	447
------	---------------------	------	-----

——台湾における日華親善論の変容——

1	戦時期台湾知識人の動向	447
2	在台日本人と台湾大亜細亜協会	450
3	南進における台湾人の役割	453
4	抵抗としての日華親善論	460
5	戦争動員のための処遇改善	464
6	脱植民地化への期待とその模索	469

第20章	若き大川周明	中島岳志	476
------	--------	------	-----

——煩悶から復興アジアへ——

1	アジア主義と超国家主義	476
---	-------------	-----

2	中学時代の大川周明	481
---	-----------	-----

3	思想の誕生	488
---	-------	-----

4	復興アジアの戦士へ	491
---	-----------	-----

第21章	日本におけるイスラーム主義とアジア主義の交錯	三沢伸生	497
------	------------------------	------	-----

——イブラヒムと亜細亜義会——

1	問題の所在	497
2	亜細亜義会の結成	498
3	山岡光太郎のメッカ巡礼	501
4	イブラヒムのイスタンブルにおける活動	504
5	日本派遣留学生	507
6	交錯の行末	509

第22章	日本におけるトゥーラン主義運動の系譜	シナン・レヴェント	517
------	--------------------	-----------	-----

——アジア主義との交差——

1	トゥーラン主義の日本への流入期	518
2	アジア主義とトゥーラン主義との接合	524

3	トウーラン主義運動の破綻	531
第23章	大タイ主義とアジア主義の交差	536
	——タイの失地回復運動と日本の南進政策——	
1	フランス植民地主義とタイ	536
2	失地回復交渉と中立政策	539
3	北部仏印進駐と失地回復運動	542
4	タイ仏印戦争と東京講和条約	546
5	失地回復運動の終了と日本からの離反	550
6	日本軍の侵攻と失地回復	552
7	日本の敗戦と大タイ主義	555
第V部	戦後アジア地域秩序の形成	561
第24章	スターリンと汎アジア主義	562
1	スターリンの根本原理、汎アジア的背景	564
2	戦後ヨーロッパ——国境、ナショナリズム、スラヴ民族	570
3	スターリンと毛の汎アジア主義	574
第25章	戦後香港と日本におけるアジア主義	584
	——錢穆と太田耕造——	
1	冷戦下のアジアとアジア主義	584
2	錢穆の試み——香港における伝統中国文化の復興とアメリカ	585
3	太田耕造と亜細亜大学	590
4	錢穆と太田耕造	592
第26章	アジアのなかのオーストラリア	598
	——アジア・太平洋の白豪主義国家から多文化主義国家へ——	
1	第二次世界大戦以前のオーストラリア	598
2	大戦後におけるオーストラリアの転換と海域アジア	601
3	アジア・太平洋の副保安官を目指すハワード政権	606
4	アジアとの間に悩むオーストラリア——ラッド政権以後	612
第27章	アジアにおける地域主義とアメリカ	624
1	分析視角	624
2	戦後アジアにおける諸地域主義とアメリカ	626

3	アジア太平洋地域主義とアメリカ	631
4	アジアにおける重層的地域構造の深化とアメリカ	637
5	アジアにおける地域主義の変容の可能性とアメリカ	642

第28章 戦後日本とアジア

——「四つの論理」と「三つのアジア」——

宮城大蔵

1	「戦後」の見えにくさ	648
2	四つの論理——「冷戦」「革命」「脱植民地化」「開発」	651
3	「四つの論理」と日本	655
4	「三つのアジア」と日本	659
5	二一世紀への展望	665

あとがき……………669

人名索引

序章 「アジア主義」の広域比較研究

松浦正孝

1 広域研究プロジェクトの経緯と基本的立場

アジア主義の相対化をめざして

これまでの日本のアジア主義研究では、主に日本の侵略・戦争をもたらしたイデオロギーを、思想史の文脈で分析することが中心であった。アジア主義は、西洋帝国主義による侵略に対してアジア連帯を呼びかける良い面も持っていたが、それが次第に日本による侵略のイデオロギーとなり、その残滓が戦後にも日本資本主義による「大東亜共栄圏」の復活として噴出してくる。そのような言説が、従来のアジア主義に関する思想史的研究のステレオタイプとしてあったように思われる。そして、アジア主義とは、日本を中心としたアジアへの膨張・連帯のイデオロギーであることが、自明の大前提であった。編者はかつて、本書の母体となる共同研究プロジェクトに際して、日本のアジア主義の一つの形である「大東亜主義」を取り上げた。そして、松井石根らの大東亜協会を中心に、通商・経済・宗教・地域・情報・学術などに基づくネットワークが結びつくことで、反西洋（反英）・反中華・反ロシア（ソ連）のポスト帝国を目指す大東亜連盟を作ろうとする政治的プロジェクトが形成され、「大東亜戦争」を引き寄せた過程を説明しようとした（松浦 2010：2011）。その際扱った大東亜協会が、汎欧羅巴を提唱するクーデンホフ・カレルギー

関 智 英 (せきとも ひで 英 (千葉商科大学商経学部非常勤講師：第 13 章翻訳)

劉 宏 (Liu Hong) (南洋理工大学人文与社会科学学院院长：第 14 章執筆)

曹 善 玉 (Cao Shanyu) (中山大学アジア太平洋研究院博士研究員：第 14 章執筆)

河 野 正 (こうのただし 正 (東京大学人文社会系研究科博士課程：第 14 章翻訳)

プラセンジット・ドアラ (Prasenjitt Duara) (シンガポール国立大学人文社会科学院院長、アジア研究所所長、人文学部ラッフルズ冠教授：第 15 章執筆)

長 崎 暢 子 (ながさきのぶこ 暢子 (龍谷大学現代インド研究センターセンター長：第 16 章執筆)

松 谷 基 和 (まつたにもとかず 基和 (早稲田大学留学センター専任講師：第 17 章執筆)

土 屋 光 芳 (つちやみつよし 光芳 (明治大学政治経済学部教授：第 18 章執筆)

何 義 麟 (Ho I-Lin) (台北教育大学台湾文化研究所副教授：第 19 章執筆)

中 島 岳 志 (なかじま たけし 岳志 (北海道大学大学院法学研究科准教授：第 20 章執筆)

三 沢 伸 生 (みさわのぶお 伸生 (東洋大学社会学部教授：第 21 章執筆)

シナン・レヴェント (Sinan Levent) (早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士課程：第 22 章執筆)

高 橋 正 樹 (たかはしまさき 正樹 (新潟国際情報大学情報文化学部教授：第 23 章執筆)

デイヴィッド・ウルフ (David Wolff) (北海道大学スラブ研究センター教授：第 24 章執筆)

李 培 德 (Lee Pui Tak) (香港大学亜細亞研究中心専任研究員：第 25 章執筆)

今 井 就 稔 (いまいなるみ 就稔 (日本学術振興会特別研究員 [PD]：第 25 章翻訳)

関 根 政 美 (せきねまさみ 政美 (慶應義塾大学法学部教授：第 26 章執筆)

大 庭 三 枝 (おおばみえ 三枝 (東京理科大学工学部准教授：第 27 章執筆)

宮 城 大 蔵 (みやぎたいぞう 大蔵 (上智大学外国語学部准教授：第 28 章執筆)

人名索引

あ 行	
アーナンタマヒドン (ラーマ八世)	548
アームストロング	15
相沢三郎	523
青柳勝敏	498
秋田茂	4
アギナルド、エミリオ	89
浅田俊介	540, 544
朝日平吾	33
アタテュルク、ムスタファ・ケマル	261, 278
アブデユルハミト二世	505
アブデユルメジド二世	279, 286
アブドゥフ、ムハンマド	257
安部磯雄	461, 463, 470
安倍晋三	114
安重根	129, 130, 132
アンダーソン、ベネディクト	189
イアウケア、カーティス・ピエハウ	194
イーデン、アンソニー	250, 570
石橋湛山	2
石原莞爾	33, 495
伊藤博文	130
犬養毅	54, 55, 81, 90, 498
井深梶之介	411
イブラヒム、アブデユルレシト	34, 260, 261, 497, 499, 502-506, 510, 511
イブラヒム、アフメト・ミュニル	507
今岡十一郎	518, 521, 529
今岡信一郎	519
入江昭	658
岩田愛之助	39, 590
岩波茂雄	463
巖本善治	421
尹致昊	30
ヴィヴェーカーナンダ	33, 489-491
ウィチット・ワータカーン	545, 546
ウィットラム、ゴフ	602
ウィルソン、ウッドロウ	225
上杉愼吉	232
植村正久	410
ヴェルナツキー、ゲオルギー	171
ヴォロシーロフ、K. E.	569
浮田和民	10, 117, 298
宇佐美珍彦	456
内田良平	409
内村鑑三	414
宇都宮太郎	499
ウフトムスキー、エスベル	14, 169-171, 174
海野弘	5
梅屋庄吉	80
エマ女王	190, 191
汪精衛	30, 31, 424, 428-430
大川周明	32, 33, 53, 177, 266, 268, 278, 477, 480, 481, 484-488, 490-492, 494
大来佐武郎	107
大隈重信	118
大島浩	521
大嶋豊	528
太田耕造	39, 584, 585, 590, 591, 593, 594
大谷光瑞	295
大原武慶	34, 497, 499, 510

《編著者紹介》

松浦正孝（まつうら・まさたか）

1962年 生まれ。

東京大学大学院法学政治学研究科博士課程満期退学。博士（法学）。

東京大学法学部附属近代日本法政史料センター、北海道大学大学院法学研究科、北海道大学公共政策学連携研究部などを経て、

現在 立教大学法学部教授。

主著 『日中戦争期における経済と政治——近衛文麿と池田成彬』東京大学出版会、1995年。
『財界の政治経済史——井上準之助・郷誠之助・池田成彬の時代』東京大学出版会、2002年。

『「大東亜戦争」はなぜ起きたのか——汎アジア主義の政治経済史』名古屋大学出版会、2010年。

『昭和・アジア主義の実像——帝国日本と台湾・「南洋」・「南支那」』（編著）ミネルヴァ書房、2007年。

『政治学のエッセンシャルズ』（辻康夫・宮本太郎と共編著）北海道大学出版会、2008年。

『復刻版 大亜細亜主義』（後藤乾一と編集解説）全26巻、龍溪書舎、2008年など。

アジア主義は何を語るのか

——記憶・権力・価値——

2013年2月20日 初版第1刷発行

〈検印省略〉

定価はカバーに表示しています

編著者 松浦正孝

発行者 杉田啓三

印刷者 藤森英夫

発行所 株式会社 ミネルヴァ書房

607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1

電話代表 (075)581-5191

振替口座 01020-0-8076

© 松浦正孝ほか、2013

重細重印刷・新生製本

ISBN978-4-623-06488-5

Printed in Japan

執筆者・翻訳者一覧（所属、執筆分担、執筆順、*は編著者）

*松浦正孝（編著者紹介欄参照：序章・あとがき執筆）

カロライン・S・ハウ（Caroline S. Hau）（京都大学東南アジア研究センター准教授：第1章執筆）

白石隆（政策研究大学院大学学長：第1章執筆）

大賀哲（九州大学大学院法学研究院准教授：第2章執筆）

姜東局（Kang Dongkook）（名古屋大学大学院法学研究科准教授：第3章執筆）

リ・ナランゴア（Li Narangoa）（オーストラリア国立大学アジア太平洋学院文化歴史言語学部教授：第4章執筆）

野村悠（オーストラリア国立大学アジア太平洋学院博士課程：第4章翻訳）

浜由樹子（津田塾大学国際関係研究所研究員：第5章執筆、第1・10・15・24章翻訳）

ノエノエ・シルヴァ（Noenoe K. Silva）（ハワイ大学マノア校政治学部・カワイフエラニハワイ語センター教授：第6章執筆）

松本佐保（名古屋市立大学大学院人間文化研究科教授：第8章執筆、第6・9章翻訳）

竹村初美（中央大学法学部、多摩大学グローバルスタディーズ学部、多摩美術大学共通教育非常勤講師：第6章翻訳協力）

ブリジ・タンカ（Brij Tankha）（デリー大学東アジア研究学部元教授：第7章執筆）

水谷明子（津田塾大学国際関係研究所研究員：第7章翻訳）

アントニー・ベスト（Antony Best）（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス国際関係史学部上級講師：第9章執筆）

ジェミル・アイドウン（Cemil Aydin）（ノースカロライナ大学チャペル・ヒル校歴史学部准教授：第10章執筆）

臼杵陽（日本女子大学文学部教授：第11章執筆）

吉澤誠一郎（東京大学大学院人文社会系研究科准教授：第12章執筆）

孫歌（Sun Ge）（中国社会科学院文学研究所研究員：第13章執筆）